

針葉樹會報

通卷第八十一號

冬山に籠る（一）

N E W

十二月十八日 餘り寒くもない穏かな朝だ。去年は沿線もすつかり雪に包まれてどんよりと凍つてゐて、島々に着いた時は雪が降り出してゐたけれども、今年は此邊にも厳しい冬が未だ來ないのかも知れない。島々の驛には末雄が迎へに出てゐた。次のバス迄西糸屋の炬燵に入つて方々へ手紙を書いたりする。バスは奈川渡迄。例の金田屋の前でおりる道はさけた雪がカチカチに凍つてゐる。じつとしてゐても寒いので、すぐにスキーを持つてどんどん歩いた。さうこうスキーをはかないで二時半に中の湯に着く。安房への路を少し上つてスキーのはき初めをやる。

十二月十九日 晴 爰隧道の附近もデブリは少く産屋澤の崩壊も下を廻らないですんだ。去年とはお話にならぬ位氣分が軽かつた。あまり樂をする事後がこわいぞと誰かが言ふ。惠れた上高地入りだ。何だか幸先のいいやうな晴れ晴れとした日だつた。この冬はうまく行きさうだぞなどと思ふ。計畫をたてながらあそこに天幕を立てて、あそことあそこに登つてそして楽しい下山の日を夢に描く。山に入つて、それが一日一日を現實になつて行くのは本當に樂しみなものだ。そして誰でもそうなればよいと考へる。しかし冬の山を相手にして誰だつて先の今まで分るものぢやない。それだけに山に入る日には未だ蓋を開けない樂しさに胸がわくわくしてくるのだ。正午、「五千尺」に入ると丁度番人は留守でひつそりした圍爐裡部屋に入りこんで待つてゐる。ガラス窓越しに岳川の山々は一ぱいに陽を受けてさえ渡つてゐるけれども、冷い木枯が積を吹き渡つてゐるのが如何にも冬の山に入つて來た感じを強くさせる。やがて番人が戻つて来て、私達の晝食に兎を炊いてくれた。大分ゆつくりしてゐたので五千尺を出る時にはもう陽も廻つてゐた。小梨平にスキーを進めて行くと美しく均衡を保つてならんでゐる西穂の側



稜が一つ一つ光と影を形作つて神殿のやうにおごそかな姿を見せた。吉城屋からは夏道を辿つていつた。夕刻徳澤園に入る。

十二月二十日 薄曇 今日は荷揚げの日なので、天幕や其他の荷物を分配して七時半に出發した。徳澤からしばらくは夏道を行つた。河原に出てからは未だ雪が薄くてスキーを持つて歩いた處もあつた。横尾の岩小舎はこの冬慶應の山岳部で手入して、入口は笹で圍つて、内は寝心地の良ささうに笹が一ぱいに敷いてあつて、實に恰好な足溜なので、私達は豫定を變へてここに移ることに定め、直ちに徳澤に引返し、慶應の人達が大勢來た時の用意に更にもう一つの天幕と残りの荷を全部持つて岩小舎に入つた。大塚と山田は出合の手前の橋迄ラツセルに行つてくる。

十二月二十一日 人數が少いし荷も多いので二度に上ることに定めて、今日は北穂に天幕を建てて、ザイルとか、石油とか重い物をすつかり揚げて降りて來ようと言ふ事になつた。五時半に岩小舎を出た。林間の道は暗かつたけれども昨日のラツセルに導かれて少しも疲れないで橋迄出る事が出來た。氣温は多少高いけれど落付いた空模様であつた。雪がしまつてゐるので行程ははかどつて圈谷の底に出たのが九時。ここから大きくデグザケを切つてやゝ暫く北穂高澤を登り、左に折れて、島々の組合で建てようと言ふ小舎の豫定地の上の臺地を横切り、更に夏の岩小舎の上方にあたつて、ポツンと露出した岩まで登つて此處をデボにした。北穂南峯の天幕地へは、北穂と涸澤岳との最底鞍部から稜線を辿つて達するか、南峯から涸澤に派出した側稜の上部に、殆ど南峯に近く深くえぐれて懸つたレンゼを登つて達するか、或はこの側稜

に早目に取付いて尾根傳ひに登るか、その三つを豫定してゐたけれども、絶好な今日の雪の状態に私達は最も能率のいゝそのレンゼを選んだ。二列の規側正しいワカンの足跡がだんだん遠のいて續いて行くのを楽しみに振返り乍ら、私達は交る交るラツセルしてルンゼの下まで登つた。結局其處から直接ルンゼには入らずにその左縁に帶狀に這上つた雪の急斜面に最後のラツセルを續けて一時過に尾根の上に立つた。丁度天幕地の平の直ぐ上で私達はそこを目がけて飛ぶやうにして降りた。早速雪をならして天幕の建設に取かかつた。北穂の頂も、もう手に取るやうに近い處だ。早くここに落付いて、快心の登攀をやつて見たいものだ。天幕を張終つて二時四十分ことを後にして、三十分でデボに降り、そこからボーゲンをかき乍ら圈谷を下つていつた。今日は殆ど動きづめであつたのと空腹とで隨分疲れて五時頃岩小舎に歸つた。夜に入つて雪になる。明日は休養にする。

十二月二十二日 曇小雪 食糧を更に補給する爲に晝から山田と二人で徳澤に出掛ける。昨日からの雪量は大した事はないが河原は少しばかりもぐつた。歸りがけには薄日もれて、天氣は次第に好轉するので急ぎ足で岩小舎にもどつた。早速明日について評議した結果、涸澤の雪量は、大塚は大した事はないと思ふと言つてゐたが、恐らく河原よりも多いだらうと自分には思はれたし、前日の涸澤の雪面の状態や、今日一日餘りはつきりせぬ空模様などを思ひ合はせて明日は自重することにした。しかし夜になるとすつかり天氣は良くなつて、満天に星が輝いた。

十二月二十三日 終日薄日がさしてゐた。池の平迄偵察を兼ね

てスキーをしに行く。行つて見るさ非常に落付いた状態で前日大塚の言つてゐた通り雪量は案外少かつた。途中で屏風岩寄りの尾根と、池の平で北穂側稜の上部に極く僅かな雪の崩落を見ただけで、結果から見て今日は完全に動き得る日だつたやうに思はれた。直ぐ上に僕等の天幕があるのだと思ふと一寸残念な氣もしたけれども明日の登高を思ふと、それもやがて消去つた。つい面白くて過勞になるのを恐れて、二時間程でスキーの練習を切上げて岩小舎に戻つた。仕度をすつかり整へて早目にシユラフにもぐり込んだ。

十二月二十四日 雪 三時に起きて見ると、外は一轉して最悪の状態に變つてゐた。屏風岩も只一面の灰色の中にかき消されてしまつてゐる。本當の荒れが來たのだらうか。好調な天氣に甘へて、もう一日は續くだらうと言ふ私達の虫の良い望は見事に拒絕されて打のめされたやうに又シユラフへもぐつた。雪は少しも勢を弱めさうもなかつた。若し昨日天幕に入つてゐたら、この雪を違つた氣持で眺めてゐられたらうにさ思ふと惜しかつた。果斷、自重、どちらも必要なことだ。しかしこの一兩日の微妙な天候との駆引に、たしかに果斷こそより必要なことであつたと思つた。

十二月二十五日、二十六日 雪 滞在。

十二月二十七日 雪 空しい三日の滞在は全く永いものに感じられた。早くこの單調な重壓から逃れたかつたけれども、どうする事も出來なかつた。四人で徳澤に出掛け食糧を補給してくる。夕方岩小舎の附近にめいめい思ひ思ひに一つづつ兎の罠をかけに行つた。その晩は赤々と燃える火を圍んでまだとれない兎をめぐ

つて、たわいもなく笑つて單調をまぎらした。若し僕の罠にかかるなら食べる前に、みんな俺に向つて「戴きます」と言ふんだぞと山田が言ふ。大塚は若しかかつたら、俺は耳の處を持つてぶる下げる四人で記念撮影をやるんだと言つてゐる。

十二月二十八日 雪 滞在。

十二月二十九日 雪 德澤の小舎に毎日のやうに吹雪の音を聞きながら登る日を待つてゐた去年の冬山の事を思つた。しかし今年はそれ以上だつた。仕方なしに對岸の林間に渡つてふかぶかと積つた雪をならしてゲレンデを作つて遊んだ。大塚は少しでも縁をつないで置くのだと言つて雪の中を大分上迄ラッセルに行つて來た。ラッセルは無駄になるかも知れなかつた。だけど、かうして一日一日が経つて行くにつれて私達の目的が一步一步遠ざかつて行くやうな氣がして私達は何かちつとしてゐられない氣持に驅られてゐた。午後から大阪から二人の登山者が上つて来て同宿することとなつた。雪は多少小降になる。

十二月三十日 今日は朝から久振に晴れ間を見せた。池の平へラッセルに出掛ける。處々で重さうに雪を戴いた針葉樹の枝がはれ返つては雪を落して、其度に濛々と雪煙が揚がる。林間の急斜はその爲に充分氣を配つて横切らなければならなかつた。池の平は身震ひのするやうなテブリで一杯になつてゐた。例の島の高みも殆ど乗越して遙か下まで押出してゐるのであつた。恐らく昨日あたり奥穂と前穂の鞍部あたりから出たものであらう。北穂高澤は未だ雪崩の出た様子もなく決して安全な状態ではなかつたし、雪もよひにもなつたので私達は早々に引上げた。しかし天氣は夕

方から良くなつて月夜になつた。月の無い頃山に入つて來た私達は知らない間に月が成長してゐたのに氣が付いて物珍しいものでも見るやうに外に出た。岩小舎をかこむ針葉樹の林は青白い雪面に影を落して、美しい銀臘の模様を描いた。雪に埋つて細々させらぎを續けてゐる横尾の流れをはさんで、私は近寄り難い城壁のやうな屏風岩を眼の前に仰ぎ見て佇んだ。そしてその城壁の續きに、月に照らされて、次々にそびえ立つ北尾根の峯々を想像した。明日は行けるぞと言ふ喜も手傳つて、忍從にも似た何日かの吹雪の日を岩小舎に過した我々はこの夢幻的な美しさに歓喜した。

十二月三十一日 雪 午前二時に起きて見るさ、案に相違した烈しい雪降りで私達はただ呆然とする外はなかつた。北尾根に行く爲に夜半に徳澤を立つた帝大の二人の人達がこの降りに斷念して岩小舎に寄つて夜明まで火を圍んで話して行つた。雪はなほも降續いた。最も順調に行けば今日は計畫の最終の日に當つてゐた。食糧も缺乏したし、日數にも制限のある私達は今日上れないさるさ、もう登攀はおろか、問題は遂に殘念にも天幕の撤收に變つて來たのであつた。末雄が「五千尺」にある自分達の食糧を分けたて呉れると言ふので兎に角そこ迄下つて何とか考へようと言ふ事になつた。河原はひどく風が吹きまくつてゐた。「五千尺」につくさ丁度、孫人が土間で氣持良ささうに風呂をつかつてゐる處だつた。私達も何日振りかで風呂に入つて、さつぱりとして氣分を新にした。大晦日だと言ふので其晩の御馳走は素敵に豪華なものであつた。(續く)

唐松行

ショーンチャマ
H・S・K

(1)

大晦日の夜の大坂驛頭は貯蓄獎勵も外に、物凄い人の波。上り七時の急行めがけてワツと許りに殺到し、窓からは入る、荷物は飛ぶ、世にも淺ましい光景にも超然と乗込んだ三名の紳士があつた。これ自稱關西針葉樹會エキストリオにして、先づ一月十日の入管を控へて、懷しのアルプスに別れを惜しむ序に身體の調子を恢復せんとの殊勝なる全部助平に、山へ行つて東京へ廻り、寄席を觀たり、握りを食べたり、針葉樹會にも顔を出し、序に妻子に對面せんとする慾張つたホースケ。又、ショーンチャマは未だ暫く子供も生れさうもなし、山へ行つた序に故郷に歸り、二日間位親幸行せんとの、何れも圖々しく一石二三鳥を狙ひ、アイザル、ビッケン、さ七道具は勇ましいが、腰かけたのは唯一人で、後は通路にドウカミ尻を敷き、アーヴィングさんが羨ましいれと。

所で一大事が二つ出來た。それは今のが亂闘で、助さんが大枚投じて買求めた自慢の夜光時計が木葉微塵となり嘆く事ゝ。今一つは僕が急行券を買はずに乗込んだが車掌が混雜の爲め來ないので、獨り小さな胸を傷めた次第です。

松本は未だ真暗で、改築中の飯田屋の渋汚い部屋で一眠りしてゐるさ、助さんは、龜さんをなだめつ、すかしつ、元旦の夜も明けぬのに時計屋を叩き起し到頭時計の硝子をものにした。ても恐ろしい凄腕。非常時購買課だけの事はある。これこそ本當の闇取引といふのだらう。やがて明け行く東天を仰ぎ、他の二人は暫し

默禱、音吐朗々と勅題「朝陽映島」を唸つたら、朝飯が實にまづかつたです。

寒い電車に搖られて聊か冷えたので四谷は白馬館の炬燵にもぐつた儘三人は仲々出發しようこしない。もう荷物を背負ふ柄でもあるまいこの助さんの提案で、黒菱迄○喜代こか言ふ勇ましいのを傭つて先にやり、白馬館得意の兎鍋としやれる。四谷積雪二尺。細野で僕が一寸着換へする間に二人の姿は見えず、此方もどんぐ行つたら何時か河原に出てしまつた。こりや大變二股へ行くといふ譯で慌てゝ廻れ右、猛烈に追かけたが既に一時間近く違つてゐるので影も形もない。細野のケレンデで下つて來た大谷喜榮に、「今そこで會つた」といはれて大汗をかき、くたくくなつてゐる。黒菱に着いたら、オイ來たかとの御挨拶でガツカリした。尤も野澤を出發して飯山に泊る人もある位だから、こんなのはマア軽いユーモアですよ。

黒菱では三階の奥に押込まれ盛に煙された。助さんも人並にへばつたさうで、三人平等にへばり、白馬館で求めたオールド・スコツチ?の醉心地も又格別。とても六十五錢の代物とは思へないです。

翌二日は伸びるには跳へ向きの雪模様で、ゆづくり起きて、上の平迄行つたら凄い風で追ひまくられ、一日小屋の前で練習する。雪を斜面に文句はないが、どうも一枚の板がまゝならぬ。だんぐ退歩する様で情けない次第です。ケレンデで偶然、故郷の甥や友達にあふ。明治に泊つてゐるさうで實際悪い事は出來ないものだ。

三人で炬燵を圍んでの話は、先づ統制下に於ける購買苦心談、大阪商人や闇取引の話。大阪のよき所（これは名に違はず全部助平が一番精はしかつた）悪い所等々。「一つ大阪辯で行きましか」「よろしうおま」が何時の間にかべらんめいに變る頃、助さんが頭をしきりに炬燵布團の中に入れ見える（）といふので、屁の色でも見えるのかと思つたら、例の夜光時計だつたには額負けの体。三階には世にも珍しい注射マニアがあつて、風邪の注射、腹の注射、脳?のとやつてゐる。明日は唐松へ行くのをやらうといふ譯で、これぢやヒマラヤへ行ける注射もあるかもしね。H.S.Kぢやないが、「あほらしくなつてけた」と許り帳場に下りたら、「三菱^{ブシ}の衆に酒が一升上つてゐる」といふ譯で、心當りは皆目ないが折角のものだと許り、ソウセージで四五本あけたら、後で三越の間違と判明大笑ひ、たゞの酒の甘さはオールド・スコツチの比ぢやないです。

扱て三日は、昨夜の話の内容から行くと、呪尺を辨ぜぬ大吹雪なるべきに、午頃からアーラ不思議や一天俄かにかき晴れてしまつた。實に惡運の強さ哉である。上る程に風強く、八方池附近ぢや吹飛ばされさう。御蔭で天氣は素晴らしい、五龍から不歸、白馬へ立並ぶ屏風の眺めは流石に立派だ。樺の邊では相當ふかれ、たつた一つしかないものの存在が怪しくなる程堪能した。かうなると助さんのつぎはぎだらけの防水の下ばかりが馬鹿に立派に見えて羨ましかつたが、寒風に鍛へよとかこれも國策スポーツなりと念じつゝ、波状雪にあるかなきかのエツヂを立てゝ突き進んだ。瘦尾根にかかる頃二人下つて來た。昨日迄は二週間も吹いたさう

だから多分證文でも書いて來たのだらう、大分慌てゝゐた様だ。

國境尾根の殆ど直下迄スキーをはき、ボク／＼テクる程にHやKは後十數間さいふ所でアイゼン等穿いたです。雪庇よりヒヨコツと顔出してやはり剣はいゝれ、等といひ乍ら小屋の前でゴロンと一つ轉倒。小屋は番人丈け。やがてどや／＼そやつて來て皆で七八人となる。どうも見た事のある様な奴ばかりと思つたら皆三階の連中だ。注射が功を奏したらしい。夜に入り外に出るゝ凄い月明で、剣が青白く冴えかへり、眞晝の様な明るさ。四谷、大町の灯も手にとる如き良夜とはこれないふのだらう。明日はよかつたら五龍へ行き一舉に淺間迄のさうと慾張つて寝についた。

(2)

(シヨンチャマ記)

細野で呼べど叫けべど行方不明になつたシヨンチャマをおいて全部助平と二人でノコノコ黒菱小舎の見える所迄來た時、やつとフーフー云ひ乍ら上つて來た。聞けば猿倉へ向つて突進した由、物凄い張り切りシヨンチャマだ。片や全部助平、會社でモリモリ働き過ぎてのびてゐたのが、雪を見れば少しば元氣になるかと思つてゐたがこの日は遂に元氣出ず、隨分とお疲れだつたらしい。曰く「やつとこれで一人前に疲れる様になつた。」さはシヨンチャマではないがアホらしくなつてけた。

さて黒菱から唐松迄日頃の精進良さで晴れてくれたので、唐松の夜の美しさはさることながら翌朝の朝焼の美事な出來榮え。エキストリオすつかり張り切つて用意万端怠りなく五龍向つて出發

せんと小舎を出て見れば、何んと今見た朝焼は何處へやら薄墨を掃いた様な空模様、眼前の剣が馬鹿に近く見えてゐる、試に唐松頂上へ行つて見るゝ五龍、鹿島には既にガスがかゝり出した。あらなきなや、そばかりシヨンチャマと全部助平相撲を始めた。アイゼンはいて唐松の頂上で風がビュービュー吹く中で相撲とは又々アホらしくなつてけた。

これで五龍行きは中止としてこれからは一直線に淺間温泉まで直滑行き三人一決ゲンゲン八方を飛ばすことにしてはよかつたが、シヨンチャマ九轉八倒滑るよりは待たせる時間の方が長いさぞ冷汗一斗の思ひだつたろうが本人至つて平氣なものだ。

それでも正午頃には黒菱着、振り返つて見れば今來た八方尾根にはもう既に霧がかゝつて猛烈な吹雪に變つてゐる、つまり吾々の通つた時だけが晴れてゐた様な次第、全部助平「へゝゝどうでえ」

一昨夜は黒菱で三越さんの酒を丁戴したり、黒菱迄超満員のさき唐松で悠然とのびたり、思へば惡運が強かつたものと話し乍ら歸り仕度してるとここに一大恐慌が起つた。

シヨンチャマが手實な奥さんに詰めてもらつたザヨニーウオツカーらしきウキスキー、リュツクの中のシャツが皆呑んでしまつて一滴もなし。シヨンチャマと全部助平の青菜に塩の顔と顔。黒菱から四谷迄面白からず。

四谷の白馬館に着くと又々黒菱の三階さん注射マニヤ氏に出会す。皆でウサギ鍋に満足して松本へ。久しうに鷹野を呼び出されんと松本聯隊へ電話で照會したる所出征中の由。

淺間温泉は満員の盛況、やつと飯田屋の一室におさまつてさて一杯。餘り盛況過ぎて待遇悪しクサツて大人しく寝る。

翌朝ショーンチャマは懷しのお郷へ、全部助平とHSK上京。八時には早や都に着きにけり。懷しの新宿へ出て先づ飛び込んだのが全部助平のおなじみのおでんや、さんざんあてられてモナミでホルモン食つて別れる。

一月七日、増山、望月、小谷部の三氏さ久しぶりの快談後歸京。

(HSK記)

記 錄

一月一日 雪 四谷(一〇〇〇一・〇〇)→黒菱小舎(四・〇〇)

一月二日 吹雪 黒菱小舎附近にてスキー練習

一月三日 吹雪後晴 黒菱小舎(一一・三〇)→八方池(一・〇〇一・三〇)→唐松小舎(四・〇〇)

一月四日 曇後吹雪 五龍往復の豫定なれど天候惡しき爲中止、

唐松岳(九・〇〇一九・二〇)→八方池(一〇・〇〇)→黒菱小舎(一・〇〇一・〇〇)→細野(二・〇〇)→白馬館(三・〇〇一五・〇)

○)→淺間温泉(九・〇〇)

記 錄

○蘇夫岳 二月十二日 中島 黒田

江原驛→バス→柄本(六・〇〇一七・二〇)→備前山(一〇・三〇)

→蘇夫岳頂上(一一・二〇)→備前山(一・一五)→柄本(三・〇〇)森さんが来る云ふので隨分待つたが遂に來ず結局彌次喜太二人。二日連休だったので又九州を合同で伯耆大山大會をやる筈

だつたが近ちやん都合悪き爲中止、そこで一段落ちて蘇夫岳行
きと云ふことになつた。

天氣は良いし風はなし、小春日和に雲がグチヤぐで滑らず、
散歩代りにさ誰も取らぬ備前山コースを行くこにした。頂上の暖かさまるで溫室の如し、下りはよく滑らない乍ら面白いコ

ース。

蘇夫岳の南にある妙見山から、この蘇夫岳迄の縱走は二月頃の雪の良い時はすばらしいことを御照會して置きます。(中島記)

○木曾御岳 二月十一、十二日 渡邊 村尾 増山 新羅

晴天に恵まれて十二日登頂の由。

○霧ヶ峯 二月十一、十二日 吉澤 望月 船本 其他

二日續きの休みで霧ヶ峯は諸を洗ふ様なこみ方。スキー場氣分は餘り良いものではないが、遙かに南、中央、北アルプス、八

ツ等の逸物に接し感慨無量。尙名古屋の小栗さんにお目にか
つた。

○白馬梅池 三月一九一二一日 村尾 其他

消 息

松木謙三君 京都へ御榮轉も束の間、應召され豫備少尉として

三月十一日仙台聯隊へ入隊された。尙去る〇日北支方面へ御出征と聞く。(別記参照)

(留守宅) 城東區龜戸町三ノ九五 五十嵐留吉方

赤城鈴太郎君 二月一六一七日公務にて上京。吉澤氏と面會。

岡山縣廳商工課勤務の由。

園山徳三郎君 朝鮮京城へ轉勤となり四月七日着任さる。

(宛名) 京城府漢江通十三、株式會社鹿島組京城營業所
柿原謙一君 牛込區河田町、陸軍經理學校幹部候補生隊第二區
隊第三班へ變更。

森脇芳之君 所屬隊名は近衛步兵第一聯隊機關銃第五班。
望月達夫君 杉並區馬橋二丁目二四〇番地へ轉居。

新入會員

(勤務先)

森川眞三郎君 王子製紙株式會社販賣部第一課(住所從來通り)
佐々木誠君 株式會社日立製作所輸出部營業課(住所從來通り)

鷺崎雄四郎君 三菱鑛業株式會社夕張礦業所
榎本直司君 株式會社文祥堂(住所從來通り)

定例集會 二月九日(木) 於如水會館

出席者(會員) 渡邊 吉澤 村尾 久保田 園山 勝田 増山
丸茂 鈴木 林 新羅 望月(學生) 森川 佐々木 岩崎 船本
日江井 宮城

現役の船本君より山岳部の三月の計畫の説明あり、又森川君より本年度委員の發表(前號十頁記載)ありたり。

園山徳三郎氏送別會 二月二十七日(月) 於如水會館

出席者(會員) 渡邊 吉澤 矢作 園山 山口 吉澤松 勝田
増山 小柳 新羅 小林 望月(學生) 森川
朝鮮の北部へ行かれることとなつた同氏と心からのお別れを交はす。

松木氏應召 三月七日 京都驛にて歡送

五十嵐 宇佐美 森 岡田 中島 黒田

午後三時頃突然松木さんから應召の知せを受け京都へ歡送に行

く。昨日迄のスマートに變る今日は軍服姿に日本刀ガツチリした勇ましさ。五十嵐さんは懃々廣島から來られ、お店の人達と共に萬歳々々歡呼の内に御家族と共に京都九・二〇出發。餘り突然だつたので歓送會も開くことが出來ずアツサリ行つてしまつた。一應歸郷後(長岡)入隊の由。東京へは殘念ながら寄れぬから宜しく傳へてくれとのことでした。(中島記)

關西針葉樹會例會 三月十日 於弘養館

(出席者) 森 岡田 中島 黒田

五十嵐さんが廣島へ行くし、松木さんは京都へ榮轉になつたと思つたらすぐ應召、小谷部さんは仲々歸つて來ないし……と云ふ譯で殘留組段々心細くなつてきた。

併しこの冬は皆頑張つて山へ行つてくれたので、今日は珍らしくもスキーと山の話に花が咲いた。

先づ第一に森さんは怪しき病氣だつたので、野澤溫泉ヘゴンチヤンと保養スキー行き、二人とも堀岡ぢやないがゴルフまでは行かぬコルフマニヤだから何れ劣らぬ天狗の鼻くらべだつたらう。續いてゴンチヤンは歸りの汽車の中で太陽を寫眞に撮つたと云ふので御自慢。何處に太陽があるかわからぬ寫眞を見せて「どうでエ」。お次は正チヤマこの前の日曜日に會社の連中さ神鍋山なるインチキスキーリー場へ出かけ、歸りにトラになつて何時家へ歸つたかわからなかつたとか、そんだトラスキーリーだ。

(中島記)

編輯後記 會報がおくれまして申譯ありません。春の現役の活動は次號にかけます。尙小生住所が變りました

(望月)